
ゼロの使い魔@姫狩り（仮）

TARUT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔@姫狩り（仮）

【Nコード】

N5972Y

【作者名】

TARUT

【あらすじ】

姫狩りダンジョンマイスターのリリイが召喚されるお話です。クロス作品ですのでご了承を。以前書いていた作品を編集しました。

今日はトリステイン魔法学院、春の使い魔召喚の儀。

一年生であるメイジが進級する際に、使い魔を召喚する神聖な儀式。

また、属性を固定し、それにより専門課程へと進む為の儀式でもある。

その中で桃色がかったブロンドの髪の少女　ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは、焦っていた。周りの皆が使い魔を召喚していき、もうすぐ自分の番がやってくるという不安。

勿論、それは他の皆も感じていることでもある。自分には一体どんな使い魔がやってくるのかなど、誰しもが考えること。

だが、ルイズは違っていた。

彼女の二つ名にはゼロのルイズ。魔法の成功の確率ゼロという、不名誉な名がついている。

貴族でありながら、簡単な魔法であるコモンマジックすら使えない。いや、すべての魔法が爆発に変わってしまうのだ。そんな彼女は、使い魔を召喚するコモンマジック、サモン・サーヴァントが使えないかもしれないという不安。

「最後になりますね　ミス・ヴァリエール」

「　はい」

担当の教師　コルベールに言われ、ルイズは周りの輪から一歩前に出て、杖をかまえる。

けれど、ルイズは目をつぶったまま一向に杖を振る気配がない。他の生徒達が少し離れながら見守る中、その待ち時間に痺れを切らしたコルベールが、ルイズに注意を促した。

「ミス・ヴァリエール、後の授業が控えているのですから早くしなさい」

コルベールの注意が聞こえたのか、ルイズは深呼吸をし、目を瞑ったまま杖を振り上げ、呪文を唱え始める。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。我の運命に従いし、使い魔を召喚せよ！」

ルイズは全身全霊をかけて詠唱して杖を振り下ろした。

そしてその瞬間、大きな爆発音が広場に鳴り響いた。

「げほ、げほっ」

「ほらみる爆発したぞ！」

「流石”ゼロ”のルイズだ！」

周りからの罵声を気にもせず、ルイズはもうもうと立ち込める土煙に咽ながら、辺りを見回す。

「見てみるよ！　何か変なのが浮いてるぞ！」

土煙が晴れていくうちに、ルイズの目の前には小さなもやもやとした黒い塊　霧と言った方が正しいのだろうか　と、白く光る水鏡のような形をした、召喚のゲートらしきものが浮かんでいる。ルイズは驚きながらもそれに触れると、すっと発散するように消えていった。

「えっと……すみません、もう一度召喚してもよろしいでしょうか？」

「いえ、まだゲートは閉じていませんよ、ミス・ヴァリエール」

ルイズは再び前を見た。確かにそこにはまだゲートがあった。だが、そのゲートは浮いたままでは何かが出てくる様子はない。

「ミスタ・コルベール。こういう場合はどうすれば……」

「私もこのような事が起こったのを見たことがないので、確かな事は言えませんが……」

ざわついた広場を見てコルベールは、手をぱんぱんと叩く。すると生徒達の目がコルベールへと向かった。

「他の皆さんは無事成功しましたね。私とミス・ヴァリエールは、もう少しこの場にいますので、皆さんは教室へ戻ってください。使い魔との交流を深めるのもいいでしょう」

「やっぱり失敗か」「ゼロはゼロのままだな」と生徒達が煽りながら去っていく中、近くにいた赤毛の少女はルイズを見つめていた。

「ルイズ……」

「ミス・ツェルプストーも早く戻りなさい」

「……わかりましたわ」

彼女自身はここで様子を見ていかっただが、コルベールに言われたとおり、彼女の使い魔である尻尾に火がついたトカゲ　サラマNDERと共に、渋々と教室へと戻っていった。

そして広場には二人になる。

しかし待てども待てども一向にゲートに変化は見られなかった。

「ミス・ヴァリエール。続きは明日にでもやりましょう。貴方ががんばっていることは私もよく知っています。私から学院長を説得してみますから」

「お、お願いします……あと少し、せ、せめてこのゲートが消えるまで待つてください!」

肩を震わせ嗚咽を漏らす、彼女の痛々しい姿に見かねたコルベールは、もうしばらく待つことにした。もっともコルベール自体、研究者として興味を持っていたというのもあるのだが。

「　待ったとして何も起きなければ、ミス・ヴァリエールは先に帰りなさい。私が責任を持ってここで様子を　」

すると、突然水鏡に波紋が広がった。

「ミス・ヴァリエール！」

「ひゃい！」

コルベールの言葉に、ルイズの中に緊張が走る　　筈だったのに返事を噛んでしまい顔を真っ赤にした。

そんなことをしている内に、小さな波紋だったそれは、どんどん大きくなり波を打つかのように荒れはじめ、来るべきであろう使い魔の影を映し出した。

そして影が飛び出てくると同時に、ぱたりと倒れるような音がした。

「あうっ」

ような、ではなかった。

「……は？」

ルイズは一瞬呆けてしまった。

使い魔が飛び出てきたかと思ったら、その使い魔がこけて倒れたのだ。頭から。

「痛いー……」

ルイズは、こけた影　を見た。

見た目さらさらとしたブロンドの髪に、青色のキャミソールドレスを着た、見た目十歳程度の少女　の頭には猫のような耳、背中にはコウモリのような羽、そしてドレスの下からちらちらと見えるのは尻尾。どう見ても人ではなく亜人だった。

その亜人の少女は、頭を抑えながら赤い目から、大粒の涙を出している。

「み、ミスター・コルベール、わわ私は亜人を召喚したんでしょうか!？」

「そう、なのだが……」

ふと、ルイズ達に気づいたのか亜人がてくてくと歩いてきて、ルイズの前に立った。

「……まおーさま？」

「え？」

「やっぱりまおーさまだ!」

そういつて少女は突然、ルイズの腕を抱きしめた。うれしそうに抱きしめるその姿にルイズは何とも言えず、コルベールの方へ目を向けると、そちらも分からないといった様子で首を傾げていた。

「ま、まおーさま？」

「どうやら敵意はないみたいです　　が。　　うつむ……」

歯切れの悪い返事にルイズが苛立ちを覚える。

「ミスタ・コルベール？」

「いえ なんでもありません。敵意はないみたいです。ので、儀式を続けましょう」

「は、はい！」

ルイズは抱きしめられていた手を解き、亜人の少女に向かって杖をかざし、呪文を唱えた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

習ったとおりに杖を少女に向け、ゆっくりと彼女の唇に自分の唇を合わせる。

「はっつ」

口から漏れた声はどちらの声だったのか。

ルイズが唇を離すと同時に、少女は左手を抑えた。その手の甲には鈍い輝きと共に、使い魔のルーンが刻まれていくそして、どうやらルーンが刻まれる際に痛みが生じるようで、その痛みに耐え切れなかったのか、少女は倒れてしまった。

「……終わりました」

「サモン・サーヴァントは不思議な現象が起きましたが、コントラクト・サーヴァントはきちんとできたね」

コルベールは嬉しそうに言った。

「使い魔は気絶してしまったようだね。使い魔は私がレベテーション運ぶから、付いてきなさい」

「ありがとうございます。ミスタ・コルベール」

自分の使い魔を見つめながらルイズは、進級できるという安心と、倒れてしまった使い魔の不安を抱えながらコルベールと共に、寮へ向かっていった。

[illegible]

ルイズはくたくたになっていた。

あの後、使い魔をレベテーションで運んでもらっていたのだが、男性であるコルベールが女子寮塔に入るわけにもいかなかったため、途中からルイズが使い魔をおぶることになった。

小さいとはいえ、人一人をおぶりながら階段を登るという重労働は、彼女にとっては少しきつかった。

そんなルイズを気にしながら、先ほど起き上がった使い魔の少女は、ベッドに座る主人の横に座っていた。

「大丈夫？ まおーさま」

「大丈夫じゃないわよ、まったくもう……」

しゅん、とうな垂れる使い魔に罪悪感を感じつつも、ルイズは先ほどから気になっていたことを聞いてみた。

「あのね、さつきから気になっていたんだけど、その”まおーさま”って何よ」

「え、まおーさまは、まおーさまでしょ？」

どこがおかしいのか、リリイは首を傾げる。

「私の名前はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。間違ってもそんな名じゃないわ」

「えーっと、る、るいず、ふらんそわーず、るぶらんら、ばりえーる？」

「ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！ 使い魔なんだから覚えておきなさい！　ところで貴方の名前は何なの？」

だが、名前、名前……と少女は俯き考えこむだけだった。

名前なんて忘れるものではない。となると、名前をつける習性がないのだろうか。ルイズはたずねてみると、リリイは首を横に振った。

「……もしかして、名前ないの？」

俯いたまま手をぎゅっと握る使い魔に、ルイズは「あー、もう！　と頭をかきながら指差した。

「私の使い魔なんだから、名前くらい付けてあげるわよ！」

「ほ、本当？」

少女の顔に笑みが浮かぶ。

「ええ。でも……そうね、リリイ……リリイという名はどうかしら？」

ルイズは不意に口にした名を出した。何故だか分からないが突然頭に浮かんだのだ。

「い、嫌なら別のも考えてあげていいのよ！」

「……それが……名前、わたしの名前」

召喚した時のように、嬉しそうにルイズの腕を抱きしめた。
ルイズは思わず抱きしめ返したくなる衝動に駆られたが、理性がそれを抑える。

「な、何よ!？」

「えへへ……凄く、嬉しい!」

「一生を決める名前を簡単に決めちゃったのに、ほ、本当に嬉しいの?」

「だって、まおーさまからの、初めての贈り物だもん」

「……だから、そのまおーさまっての止めなさいよ。まるで私が少女を攫った魔王みたいじゃない。ご主人様って呼びなさい」

「うー……ご、ごしゅじんさま」

「よろしい」

ルイズは満足げに頷いた。

こうやって躑けていけばドラゴンやグリフォンとまではいかないが、ちゃんとした使い魔になっていくだろう。多分。

「それじゃあ使い魔の役割とか説明するわね」

「はい!」

能天氣に返事をするリリイに対して少し頭が痛くなるが、ルイズはそのまま続けた。

「……まず使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるのよ」

「わたしが見たものがごしゅじんさまにも見えるの？」

「そうよ。でも、見えないわね」

「うー……」

「まあ、しょうがないわよ。亜人の使い魔なんて聞いたことないんだし、そういうこともあると思いますよ。次に、使い魔は主人の望むものを見つけてくるの。例えば……そうね、秘薬とか」

「秘薬ってなあに？」

「……」

ルイズはがつくりと首を垂れた。

「……そして、これが一番重要！ 使い魔は主人を守る存在であるの！ 主人を敵から守るのが一番の役目！ なんだけど……」

「がんばるよ！」

自分より小さい使い魔が自分を守る姿が想像できなかった。目を輝かせてやる気を見せる使い魔には悪いが、洗濯掃除、その他雑用を頼んでおこう、とルイズは心の中でため息を吐いた。

そうやってリリイと話していると、突然部屋のドアががちゃりと開いた。

扉からは燃えるような赤い髪の子が顔を出してルイズ達を見ていた。いや、女の子というにはルイズより背が高く、やや大人びた雰囲気をしている。

「こんばんは。ルイズ」

「こんばんは。キュルケ。アンロックは校則で禁止されているはずよ？」

ルイズは顔をしかめると、キュルケと呼ばれた女はにやりと笑った。

「いいじゃないの。……へえ、それが貴方の使い魔？」

キュルケはリリイを見ながら少し感心したように言った。

「そうよ、何か文句でもあるの!？」

「別にないわよ。まずは召喚おめでとう。ルイズ」

キュルケが素直におめでとうと言ったことに対して、ルイズは信じられないような顔をした。

キュルケの実家である、フォン・ツエルプストー家とヴァリエール家は、不倶戴天の敵同士だ。更にルイズ自身、キュルケのことは好きではない。学院に入ってからずっとゼロのことでからかわれ続けていたからだ。

そんなキュルケから、おめでとうという言葉を受け取るのに、少し戸惑いを覚えたが、好意は素直に受け取るべきだと考えたルイズは、お礼の言葉を言おうとしたのだが……。

「あ、ありがとう」

「で・も・ね、やっぱり使い魔にするならこっというのが良いわよね。フレイム！」

キュルケは、勝ち誇った声で使い魔を呼んだ。すると廊下からのっそりと、真っ赤で巨大なトカゲが現れた。その瞬間、部屋に熱気が吹いてくる。

「こ、こ、これって、サラマンダー？」

大きさは虎ほどもあるだろうか。尻尾が燃え盛る炎でできており、その色は鮮やかだ。

「そうよ、火トカゲよ。見てよ、この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ？ 好事家に見せたら値段なんかつかないわ」

「そりゃあ良かったわね」

苦々しい声でルイズは言った。

「素敵でしょ。あたしの属性ぴったり」

「あんた、火属性だもんね」

「ええ。微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱。でも、男はそれでイチコロなのですね。ヴァリエールと違ってね？」

キュルケは得意げに胸を張った。

ルイズも負けじと胸を張り返す。差は明らかなのがそれでもルイズはぐっとキュルケを睨みつけた。

「ツエルプストーみたいに、いちいち色気振りまくほど暇じゃないだけよ」

キュルケはにつこりと笑った。それは余裕の態度だった。それからリリイを見つめた。

「あなた、お名前は？」

「リリイだよ。さっきごしゅじんさまにつけてもらったの」

「あら、可愛い名前ね」

「えへへ」

ルイズにもらった名前を可愛いと言われ、嬉しそうに微笑むリリイ。

「ルイズ、貴方も自分に合う使い魔で良かったわね」

メイジの実力をはかるには使い魔を見ると言われているくらいだ。キュルケにはサラマンダーがいるように、ルイズにはリリイがいるのだ。

「そう、貴方にぴったりね……主人に使い魔、そろって胸がゼロな所が」

「なななな何を言うのかしら!？」

「ふふ。じゃあ、また明日ね」

そう言つて、炎のような赤髪をかきあげながらキュルケは部屋から去っていった。その後を、ちょこちょこと大柄な体に似合わない可愛い動きでサラマンダーが追う。

キュルケがいなくなると、ルイズは拳を握り締めた。

「くやしー！ なんなのあの女！ 自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！ ああもう！ 腹が立つわ！」

ルイズも、リリイを召喚できた事で少しは自信を持ち始めていたが、やはりサラマンダーと比べると、こちらは使い魔というより従者に近い。ルイズ自身、強力な幻獣を召喚することに憧れを持っていた為、敵であるキュルケが、サラマンダーを召喚しているという事実が、ただ悔しかった。

「ごめんなさい……」

ルイズは、ハツとした。

やる気を見せていた使い魔の前で、他の使い魔を羨ましがり、あまつさえ自分の使い魔を比較してしまった自分自身を、ルイズは恥じた。

リリイのお陰で自分は、ゼロから一に変わったというのに。リリイは成功の第一号の筈なのに。

「……謝る必要はないわ。それに、私たちは大きくなればいいのよ」
小さければ、使い魔と共に大きくなればいい。

「そう、それこそちい姉様みたいに！」

その後、いつの間にか胸の話に変わっていたのだが、やる気を見せる主人の横で、応援する使い魔がそこにあった。どうやら話が変わった事に気づいてないようだった。

ルイズが目覚めて初めて目にしたのは、使い魔の寝顔だった。

そういえば、昨日一緒に寝たんだったと思い出したルイズは、ベッドの中で寝息を立てている使い魔の、あどけない寝顔を観察する。こうして見ると本当に幼く見える

。

しかし、すがすがしい朝だ。

眩いばかりの朝日に焼かれた天井を見ながら、大きく欠伸をして体を伸ばした。んー、と唸りながら両腕を真上に伸ばす。

ベッドから下りたルイズは、寝間着を一気に脱ぎ捨て、下着姿になる。肌寒さを感じて少し震えながら、クローゼットから制服を取り出し、鏡の前で着ていく。最後に乱れた髪を整えたところで、未だに使い魔が寝てることに気づいた。

「……………何時まで寝てるのよ!」

ルイズは叫びと共に毛布をはいだ。

「ひゃう!?!」

情けない声と共に飛び起きるリリィに、ルイズはため息を吐く。

「何か手のかかる妹が出来たみたいだわ……………」

「……ごめんなさい」

「はあ。何で謝ってばかりなのよ」

「ずっと役に立たなかったから、いつか捨てられるんじゃないかって不安だったの……。でも、昨日、名前くれた！ 頑張るって決めた、のに……」

泣きそうになるリリイの頭を軽く撫でると、う、小さく声を出した。

「ほら、そこに座って」

リリイをベッドに座らせ、ルイズは櫛で彼女の髪を丁寧に梳く。窓から差し込む朝日を浴び、金色の髪は優しくに光る。

時折、櫛の歯が引つ掛かるが、もともと癖のない髪だった為、そこまで掛からずに整っていった。

髪を整える感触に、リリイは気持ちよさそうに目を瞑っている。

「捨てるなんて、そんな事するわけじゃないじゃない」

突然ルイズが囁くと、リリイは驚いて振り向く。

「使い魔の契約はね、一生よ」

だから、とルイズ続ける。

「私かあんたが死ぬまで契約は続くの。いい？ 分かった？」

「はい！」

頭についている獣の耳が、ぴこぴこと動いているのを見てルイズは、これじゃあ妹じゃなくてペットね、と苦笑した。

/ / / /

トリスティン魔法学院の食堂は、学園の敷地内の真中にある本塔の中にある。

食堂の中には長いテーブルが三つほど並んでおり、ここで朝食、昼食、夕食と、学院の中にいるすべてのメイジ達が、ここで食事を取るのだ。

テーブルにはいくつもの蝋燭が立てられ、花が飾られ、果物が盛られたカゴが置いてある。

「ここがアルヴィーズの食堂よ」

リリイが食堂の豪華さに、口をぽかんとあけているのに気づくと、得意げに指を立ててルイズが言った。

「トリスティン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないのよ。メイジはほぼ全員が貴族なの。貴族たるべき教育を受けるの。だから食堂も、貴族の食卓に相応しいでしょう?」

「ほへー」

珍しそうにリリイはきょろきょろと見てみると、ふと壁際に並ぶ

小人の彫像が目に残った。あれは何かとルイズにたずねると「アルヴィーズよ」と簡潔に答えた。どうやらアルヴィーズという名の銅像らしい。

そういつてる間にルイズは自分の席の前で止まった。それに気づいたリリイは椅子を引く。

「あら、気が利くのね」

「えへへ」

ルイズは引かれた席に座る。リリイは後ろに立ちながら、物欲しそうにテーブルに並ぶ料理を見ていた。

まさか使い魔を同席させるわけにも行かないので、ルイズはどうしようかと考えていると、給仕中のメイドがいたので声を掛けた。

「ちょっと、その貴方」

「は、はい！ 何でしょうか？」

呼び止められたメイドが、ルイズに向かってくる。

「私の使い魔に何か食べさせてやって」

「は、はい、畏まりました」

「リリイ、食べ終わったら戻ってきなさいよね」

「うん！ あ、ごしゅじんさま、これ渡しておくね！」

リリイはポケットから、模様の入っている透き通った赤い石をル

イズに手渡し、メイドと共に食堂の奥へと向かっていった。
ルイズは渡された石を見ながら、椅子を引いたり後ろに控えるなど、出来た使い魔だとルイズはリリイのことを少し感心した。

/ / /

「ええっと、あの、あなたはミス・ヴァリエールの使い魔なのですか？」

銀色のトレイを持った黒髪のメイドはまじまじとリリイを見ながらたずねた。

「使い魔のリリイだよ！」

リリイは左手に描かれたルーンをシエスタに見せると、納得したような、してないような複雑な顔をした。

「私はシエスタって言います。……その年で貴族様の使い魔をされるなんて、大変ですね」

メイド シエスタは貴族のわがままに振り回される、使い魔の少女の姿を想像して苦笑する。

「お耳と羽は飾りですか？ 可愛いですね。城下町で買ったんですか？」

「へっ？」

突然の言葉に戸惑い、リリイの耳がぴこぴこ動く。それを見たシエスタは、ひゃ、と驚いた声を上げた。

その拍子にトレイを落としてしまったが、リリイはそれをキャッチした。

「ほ、本物ですか？」

その言葉にリリイは頷きながらトレイをシエスタに渡す。

「わたしは睡魔族だよ」

「……今年は凄いですね。ミス・タバサも風竜を召喚していらっしやいましたし」

貴族の使い魔の餌やりに慣れているシエスタには、安全だということが頭に入ってたので、最初は亜人ということに驚きはしたものの、受け入れることが出来た。

何より容姿が小さい子供だったというのが、一番の理由であるのだが。

シエスタに連れられた先は、食堂の裏にある厨房。そこではコックやらメイドやらがせっせと料理作っては運んでいた。

その一人であるがたいの良い中年の男がシエスタ達に目をやった。

「シエスタ！ 給仕はどうしたんだ」

「あ、マルトーさん。実は使い魔さんの食事を頼まれまして……」

「使い魔だあ？」

マルトーと呼ばれた男は訝しみながらリリイを見た。

「全く物好きな貴族様もいたもんだな。それ終わったらさっさと戻るんだぞ。貴族様は少しのことで怒り出すんだからな」

「はい、分かりました」

シエスタの返事を聞くとマルトーは、慌しい中へと戻っていった。厨房の端にあるテーブルにリリイを座らせると、「ここに座って待っててね」と言ってシエスタは席を外す。

そして戻ってきた時には、持っていたトレイに温かいスープとパンが乗っていた。

「良かったらどうぞ」

そのスープは、先ほどルイズ達のテーブルに並んでいたのと一緒にのものだった。

「わあ、良いの！？」

「ええ」

シエスタはにっこりと微笑んだ。リリイはスープをスプーンで口に運ぶ。

「……もきゅもきゅ」

「美味しいですか？」

「美味しい！」

シエスタはリリーの口に合うか不安だったが、どうやら味覚は一緒のようだった。

「おい、シエスタ！ 早くしろ！」

マルトーの怒鳴り声の様子から、今忙しいことがはっきりと分かる。

「あ、はい！ ……ごめんなさい。私もお仕事があるから、またね」

「うん、ありがとうね！」

出て行くシエスタにお礼を言いながら、再びスープを口にする。そして平らげたお皿を厨房の方へと持っていき、先ほど大声を上げていたマルトーに尋ねた。

「このお皿はどこに置けばいいの？」

「あん？ ああ、そこに置いといてかまわんぞ」

リリーはマルトーが指差したところに、食器を置いた。

「お嬢ちゃん小さいのにしっかりしてんな！ またここに食いにきてもいいぞ。出来ればちいっとはかし、時間をずらしてくれると助かるんだがな」

「うん、わかった。ありがとう！」

元気よく返事をしたりリイは、厨房から出て行った。俺にもあのくらいの娘がいたらなあ、とマルトーの呟きは、慌しい厨房の中へと掻き消えていった。

食堂の前でリリイと合流したルイズが、次に向かった先は教室だった。

ルイズ達が入っていると、先に教室にやってきていた生徒達が一斉に振り向く。どうやら使い魔を食堂に入れたせいで、噂になっているようだ。

皆がルイズ達 いやルイズの使い魔を見て驚いた顔をしている。その中にキュルケもあり、周りには男子達を取り囲んでいる。

その視線に少し恐くなったのか、リリイはルイズの後ろに隠れ、服の裾をつかんだ。しかし当のルイズはクラスメイト達の視線など気にもせず、教卓から一番離れた奥の席に向かっていった。

座ったのを確認したリリイは、立っているべきなのか悩んでいると、ルイズが隣の椅子を指でとんと叩く。座れとの合図と考えたりリイは椅子に座った。ぼんやりしながらリリイは席に座った。教室には様々な使い魔がメイジと共にいたが、どれも自分のような使い魔はいなかった。

「お隣、よろしくて？」

そういつて有無言わずリリイの隣に座ったのは、先ほどまで男子達に囲まれていたキュルケだった。

彼女の使い魔であるサラマンダーも、のそのそと歩いてきて椅子の下に潜り込む。

先ほどまでキュルケがいた席の方を見ると、男子達が睨むようにこちらを見ていおり、思わずルイズとリリイは視線を前に戻す。

「おはよう。ルイズ」

「……おはよう。キュルケ」

昨日のことを根に持っているのか、元々なのは分からないが、ルイズはキュルケを睨む。それを涼しそうに見つめながら、キュルケはサラマンドーを撫でていた。

「使い魔ちゃんもおはよう。昨日は暗くてあまり分からなかったけど、結構可愛いわね」

「えへへ」

「ツエルプストーと喋っちゃだめ！」

そうしている内に扉が開いて、紫色のローブを着た中年の女性が入ってくる。そして教卓の前に立つ。

「皆さん。春の使い魔召喚は大成功のようですわね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのです」

教室を見回すと、満足そうに微笑んで言った。

「では、授業を始めますよ」

シュヴルーズは、ほんと重々しく咳をすると杖を振った。すると机の上に石ころが数個現れる。

「私の二つ名は、赤土。赤土のシュヴルーズです。土系統の魔法を、これから一年、皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存知ですね？ ミスタ・マリコルヌ」

「は、はい。ミセス・シュヴルーズ。火、水、土、風の四つです」

シュヴルーズは頷いた。

「今は失われた系統魔法である虚無を合わせて、全部で五つの系統があることは、皆さんも知つてのとおりです。その五つの系統の中で土はもっとも重要なポジションを占めていると私は考えます。それは、私が土系統だからというわけではありませんよ。私の単なる身びいきではありません」

シュヴルーズは、重々しく咳をした。

「土系統の魔法は、万物の組成を司る重要な魔法であるのです。この魔法がなければ、重要な金属を作り出すこともできないし、加工することもできません。大きな石を切り出して建物を建てることもできなければ、農作物の収穫も、今より手間取ることでしょう。このように、土系統の魔法は皆さんの生活に密接に関係しているのです」

リリイは首をかしげた。気になったを聞いてみようとルイズを見てみると、彼女は真剣に授業を聞きながらノートを取っていた。

邪魔しては悪いだろうと再びシュヴルーズの方へと向く。

「今から皆さんには土系統の魔法の基本である、錬金の魔法を覚えてもらいます。一年生のときにできるようになった人もいるでしょうが、基本は大事です。もう一度、おさらいすることに致します」

シュヴルーズは石ころに向かって、手に持った小ぶりな杖を振り上げ、短くルーンを眩くと石ころが光りだした。そして光がおさま

ると、ただの石ころだったそれは、ピカピカ光る金属に変わっていた。

「ゴ、ゴ、ゴールドですか？ ミセス・シュヴルーズ！」

リリーの隣に座っていたキュルケが、身を乗り出してたずねた。

「違います。ただの真鍮です。ゴールドを錬金できるのはスクウェアクラスのメイジだけです。私はただのトライアングルですから……」

「キュルケ、キュルケ」

リリーはキュルケをつついた。

「なにかしら、使い魔ちゃん」

「スクウェアとか、トライアングルとかって、何なの？」

「系統を足せる数のことよ。それでメイジのレベルが決まるの」

キュルケは小さな声でリリーに説明した。

「例えば……そうね、土系統の魔法はそれ単体でも使えるけど、火の系統を足せば、さらに強力な呪文になるの。一系統しか扱えないのがドットメイジ、火と土のように、二系統を足せるのがラインメイジ。そんな風に三つ足せるのがトライアングル、四つ足せるのがスクウェアクラスのメイジよ」

ちなみに私はトライアングルよ、と付け足した。

キユルケは、ふふんと自慢げに笑った。

「ほへー」

「ちょっと！ ツエルプストーなんか聞いてないで、私に聞きなさいよ！ って、あ……」

大きな声を出してしまったことに気づいたルイズは、顔を真っ赤にして俯く。

「ミス・ヴァリエール」

「ほんと、重々しく咳をしてシュヴルーズは言った。

「は、はい」

「授業中の私語は慎みなさい」

「すみません……」

生徒達の、くすくすと囁きあつて笑う声がした。

「お喋りをする暇があるのなら、あなたにやってもらいましょう」

「え？ 私？」

その言葉に、笑い声がピタリと止まる。

「そうです。ここにある石ころを、貴方の望む金属に変えてもらいなさい」

ルイズは立ち上がらない。困ったように俯いたままだ。

「ごしゅじんさま、頑張つて！」

「ミス・ヴァリエール、どうしたのですか？」

訝しむシュヴルーズに、キュルケが立ち上がって言った。

「先生」

「なんです？」

「やめといた方がいいと思いますけど……」

「どうしてですか？」

「危険です」

キュルケはきっぱりと言うと、教室のほとんど全員が頷いた。皆の表情は真剣そのものである

「危険？ どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやってもらいなさい。失敗を恐れ

ていては何もできませんよ?」

「……やります」

ルイズは立ち上がった。

「ルイズ。お願い、考え直して!」

キュルケが蒼白な顔で言う。

それを無視し、ルイズは緊張した顔で、つかつかと教室の前へと歩いていった。そして隣に立ったシュヴルーズは、にっこりとルイズに笑いかけた。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

こくりと頷いて、ルイズが手に持った杖を振り上げた。

「使い魔ちゃん、机の下に隠れなさい」

「へ? 何で?」

「さつき、ドットやラインの話をしたわよね。一系統しか扱えないのがドットメイジ、二系統を足せるのがラインメイジ、三系統がトリアングルメイジ って」

「うん」

「ルイズはね、そののどれにも属さないの」

リリイはキュルケの言葉に首を傾げる。その間にもルイズがルーンを唱え始めたのが聞こえたキュルケは、無理矢理リリイの頭を掴んで机の下に隠した。

「ルイズの魔法はね、爆発するのよ！」

その瞬間、光に包まれた石ころは机ごと爆発した。

爆風をモロに受け、ルイズとシュヴルーズ先生は黒板に叩きつけられた。爆音で驚いた使い魔たちが暴れだし、生徒達は悲鳴を上げる。

教室が阿鼻叫喚の大騒ぎになった。

「やっぱり爆発したぞ！」

「もう！ ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

煤で真っ黒になったルイズが、むくりと立ち上がる。服が破れて見るも無残な格好だったが、顔についた煤を、取り出したハンカチで拭きながら、淡々とした声で言った。

「ちょっと失敗みたいね」

当然、他の生徒たちから猛然と反撃を食らう。

「ちょっとじゃないだろ！ ゼロのルイズ！」

「いつだって成功の確率ゼロじゃないかよ！」

「うるさいわね！」

ぎゃあぎゃあとルイズ達がしゃべってる中、リリイが顔を出す。席が離れていたお陰でこちらの方にはそこまで被害がなかった

「あうう」

が、リリイはおでこを抑えながら涙目になっていた。どうやら爆音にびっくりして机にぶつけたらしい。

リリイに続いてキュルケも教室を見ながらあきれた声をあげた。

「前よりも酷くなってるわね……」

その後、爆発音を聞いて駆けつけた別の教師が、教室の惨状を見て絶句した後、騒ぎ立てる生徒達を解散させ、シュヴルーズは医務室へ運び、ルイズには教室の片づけを命じたのだった。

瓦礫だらけの教室に、生徒二人と一人の使い魔がいた。

「はあ……」

煤埃に汚れた服と教室を見つめながら、ルイズのため息を吐く。

ぼんやりとルイズは張り替えたばかりの窓ガラスから外を見れば、瓦礫の山があった。それは自分が壊した机などの残骸だった。

「召喚も契約も上手くいったのに……」

期待していた分だけショックが大きかった。それも今までで一番大きな爆発。

ルイズは再び深いため息を吐いた。

「ほらほら、ちゃんとしなさいよ」

「……うるさいわね！　そこにいるならあんたも手伝いなさいよ！」

先に片付けられた場所にはキュルケが座っていた。

本来なら一人……と使い魔でやらなければいけない筈なのだが、キュルケは暇つぶしでつきあっていた。

この事を教師達は知らない。ルイズ自身も最初に断っていたので、これは”キュルケが勝手にやっていること”になっている。

ルイズはぐつと睨みつけるが、キュルケは涼しげな顔をしていた。

「手伝ってあげたじゃない。魔法を使っちゃいけなかったのに、あたしがレビテーションで机とか窓ガラスを運んであげたのよ？ 貴方達二人だけなら、どれだけ時間かったことやら」

「くっ……」

先ほどまで窓ガラスは割れてたり、吹き飛んだ机と椅子で滅茶苦茶になっていたのだが、キュルケの魔法のお陰で窓ガラスは替え終わり、机等は全て運び出されていた。

もしキュルケがいなかったら、重たい窓ガラスや机を、二人で歩いて運ばないといけなかっただろう。

悔しかったがルイズは何もいえなかった。教室で爆発を起こしたのは自分なのだから。

「ほらほら、小さい使い魔ちゃんが頑張ってるんだから」

キュルケが指差す方では、リリイは残っていた大きな目の瓦礫を外に運びだしていた。

そしてルイズは自分の手元を見やる。そこには塵一つ付いてない、綺麗な机が。

「完璧ね」

「……手伝ってあげなさいよ」

あきれた様に言いながら、キュルケは頬杖を付いた。

大きい瓦礫はキュルケの魔法とリリイのお陰で片付け終わったので、ルイズは箒を手についた。

それを見たリリイはちり取りを持ち、ルイズが集めたごみを入れていった。

何も文句を言わず、当然の如く自分の片づけを手伝ってくれる使い魔を見て、ルイズは唇を噛み締めていた。

「ねえ、リリイ」

「ほへ？」

「何も言わないの？ あんたのご主人様は魔法が使えないのに、それなのに……」

ルイズの声は、僅かに震えていた。いや、声だけではない。僅かだが体も震えていた。

それを見たリリイは、ちよいちよいと手でしゃがむように合図する。

何かとルイズは軽く膝を曲げてしゃがんでいると、リリイの両手がルイズの頬に触れた。そしてそのまま引き寄せ、唇を深く重ねられた。

「んっ……！？」

生暖かいものが触れたかと思うと、それは自分の唇をこじ開けて口内へ入ってきた。そして舌に絡められ、歯をなぞられた。

その行為に顔が火照ってくるが、逆に体は何かが抜かれるように冷めていく。まるで力が抜けるような　その感覚にルイズは思わずリリイの肩を掴んで引き離れた。

「な、何するのよ！」

ルイズ顔を真っ赤にしながら怒鳴る。

「ごしゅじんさまは絶対に強くなるよ。ごしゅじんさまの力が強いもん」

リリイがぺろりと舌で自身の唇を舐め、笑みを浮かべていた。

「というか今のって」

「ルイズ、貴方ってそういう趣味があつたのね」

その言葉にルイズの首が、ぎぎぎ、とキュルケのほうへ向くと、キュルケの顔もほんのりと赤くなっていた。

「貴方が入学当初、どうして男性からの誘いを断っていたのかよく分かったわ。性格だけじゃなかったのね。いいのよ。趣味は人それぞれだもの。私は気にしないわ。ええ」

「ち、違っわよ！ そんなわけないじゃない！」

「まあいいわ。あたしは机を運んでくるわね」

そういつてキュルケは廊下に出ていった。

扉が閉じられ姿が見えなくなるのを確認すると、ルイズは肩を落とした。

「……なんであんなことしたのよ」

ファーストキスだけでなくセカンドキスまで同姓とするなんて……と、ぶつぶつルイズが呟く。

「ごしゅじんさまは魔力が高いから、それを減らしたら制御できるんじゃないかなーって思ってたの」

「何よそれ、その魔力つてのが減ったら出来るって言うの？」

首を傾げながら、多分、といかにも疑問符が付くような声でリリイは言った。

ルイズは考えた。

考え、考え、考えた末に、あるものが目に映った。それは小さな石の破片。

恐る恐る杖をその破片へと向け、ごくり、と思わずルイズは息をのんだ。

そして、その日二度目の爆発音が、トリステイン魔法学院に響き渡った。

/
/
/
/

掃除を終わらせたルイズは、自分の部屋で待機していた。

本来であれば今頃は授業に出ている時間なのだが、ルイズは自室で謹慎。理由は一度ならず二度も教室を爆発。加えて魔法禁止だったのを破ってしまったというのもある。

とは言ったものの、やることがない。

読んでいた本を閉じてルイズは深くため息を吐いた。元々座学の成績は悪い方ではないので、予習する必要はない程度に頭に入っている。

かと言って、失敗の原因を探ろうにも、彼女の姉であるアカデミ一の研究員のエレオノールですら、未だルイズの爆発の原因を見つけることが出来ていない為、生徒が見れる本棚の中に原因を突き止められるような本がある筈もないだろう。

ルイズは、リリイを眺める。机の上でリリイは一心不乱に紙に何かを描いていた。

「ずいぶんと個性溢れる絵ね」

本来、いる筈の無い人物、キュルケがリリイの絵を見ながら感想を述べた。キュルケの隣にいる青髪のやや小柄な少女も、絵をみて頷く。

「何であんたが私の部屋にいるのよ」

ルイズは面倒そうに言いながら、ベッドの上で頼杖を付く。

キュルケは少し考えたそぶりを見せたと思ったら、わざとらしく目を見開きながら、驚いたようにこう言った。

「あら、ヴァリエール、いたのね!」

「爆発されたいの?」

杖を構えながら額に青筋を立てるルイズに、キュルケは「おい怖い、怖い」と、おどけて見せた。

「あんたねえ……」

「別にいいじゃない。どっかの誰かが二度も教室を爆発させたせい
で、あたしまで謹慎させられたんだから」

百歩譲ったとしてもあんたが謹慎されたのは自業自得よ、と心の中
でルイズは言った。

「ところでこの子誰よ。さっきからいるけど」

「タバサっていうの。あたしの友達よ」

「あんたの知り合いなのは分かるわよ……授業中じゃないの、今」

「さばり」

青髪の少女　タバサは簡潔に答えた。

ルイズも、ふーん、と返す。

「あ、このパイ美味しそうね」

「勝手に食うな!」

キュルケはテーブルにあったクックベリーパイを、勝手に切り分
けようとしたので、ルイズは止めた。

「いいじゃない。貴方だってこんなに食べれないでしょ?」

目の前にあるクックベリーパイは、大体直径十八センチだろうか。

一人で食べるような量ではなかった。

「そのクックベリーパイは、リリイが私の為に厨房で貰ってきたの。それに、ツエルプストーにあげるパイは一切れたりとも無いわよ！」

「ねえ、使い魔ちゃん。食べて良いわよね？」

キュルケはルイズの言葉を見殺してリリイにたずねた。

「うーん、とリリイは少し間をあけてから頷いた。一切れ皿にのせ、キュルケの前に差し出す。」

「さっきのお礼だよー」

「さっき？」

キュルケは不思議そうに首を傾げる。

「爆発から守ってくれたの！」

キュルケは、ああ、と思い出したかのように声を上げた。ルイズの方は爆発と聞いて、う、と呻く。

ちなみに二度目の爆発はルイズ共々煤だらけになっていた。

「本当に可愛いわ！　ゼロのルイズの使い魔なんてもったいないわね」

「うるさい！」

ルイズは不機嫌そうにテーブルに座り、ティーカップを取った。カップからは湯気が登っており、良い香りの紅茶が淹れられている。

る。

「で、本当に何しにきたのよ」

不貞腐れながらルイズは一口飲んだ後、ティーカップを下ろし、シュガーポットを開けてティースプーン一杯入れ、かき混ぜる。

リリイはそつとルイズの前に、切り分けたクックベリーパイを運ぶ。ルイズはソレをフォークで一口サイズに切り、口に入れた。

「さっき言つたとおりよ。暇だからヴァリエールをからかいに来たの」

「今すぐ出てけ！」

「冗談よ、冗談」

あつはつは、とキュルケはルイズの反応を見て笑った。

リリイはタバサにも、切り分けたクックベリーパイをのせたお皿を渡す。

タバサは小さく「ありがとう」と言った。

「使い魔ちゃんを見てたら、ヴァリエールの属性がちょっと気になったのよね。それで暇つぶしに押しかけただけよ」

「属性……あ」

ルイズは、ぽん、と手のひらを打った。

メイジの実力をはかるには使い魔を見る、というのをルイズは思いついた。

もしかしたら使い魔を見て自分の属性が分かるかもしれない。

「やっぱり羽が生えてるんだから、風じゃない？」

「あの情熱的なキス……間違はなく火よ」

「そのこと忘れなさいよ！」

「忘れてくても忘れられないわ。人前であんな……」

「そんなんじゃないわよ！」

「彼女は亜人。先住魔法を使えるかもしれない」

タバサの言葉に、ルイズ達は一斉にリリイを見る。

リリイはクックベリーパイを頬張っている所だった。

「ねえリリイ、あんたは何か出来るの？ その……魔法とか」

気まずそうにルイズがたずねてみる。

もしかしたら自分と同じゼロかもしれない。ルイズの中にはそんな不安もある。しかし、それと同時に期待するような眼差しで見ている。

「できるよー」

リリイは持っていたフォークを垂直に、ルイズ達が聞いたことのないような言葉を唱えた。するとリリイが持っていたフォークの先から、強い輝きが現れた。

思わずその眩しさに、ルイズ達は手で光を遮った。

「もうちょつと抑えなさいよ、それ！」

ルイズの言葉を聞いてリリイは光に手を翳すと、光が徐々に弱ま

っていく。

まだ少し眩しかったが、ルイズは遮っていた手を下げて光を見つめる。その光は、日光のような色をしていた。

「これ、ライト？」

それはルイズ達メイジが使う、コモン・マジックのライトに似ていた。ちなみに、ルイズはライトも使うことができない。

リリイは出来た光の塊を手のひらでぎゅっと握り締めた。手を開くと、先ほどまであった光が跡形もなく消えた。

「他にも出来る！？　たとえば風とか……べ、別に火でもいいわよ！」

うーん、と考えるようなそぶりをしているリリイに対してタバサは言った。

「どっちも部屋の中だと危険」

「そ、そうだったわ。これで騒ぎを起こしたら、謹慎どころじゃすまないものね……」

先ほどまで興奮していたルイズは、残念そうに言った。

「わたし、ごしゅじんさまのためにがんばるよ！」

気合を入れようとポーズをとるリリイを見て、キュルケは抱きついていた。

「やーん、可愛いじゃない！　ねえ、ヴァリエールの使い魔なんて

やめて私のところにきなさいよ」

「は、離れなさいよ！ ツエルプストーにやるものなんて塵一つもないわよ！」

「でも今日は爆発をくれたわね」

「うるさいうるさいうるさい！」

二人の騒ぎで、再び教師達に怒られるのは時間の問題であった。

1 - 5 (後書き)

神採りの思春期リリイのクリティカル時C Gがレールガンだったという。

いまさらながらアペンド入れて気づいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5972y/>

ゼロの使い魔@姫狩り（仮）

2011年11月29日16時48分発行